

名古屋
山三郎
不破
伴左衛門

繪本縮巻表紙

四

3151
4



3151
4

昔話稿妻表紙卷之三

江戸

山東京傳編

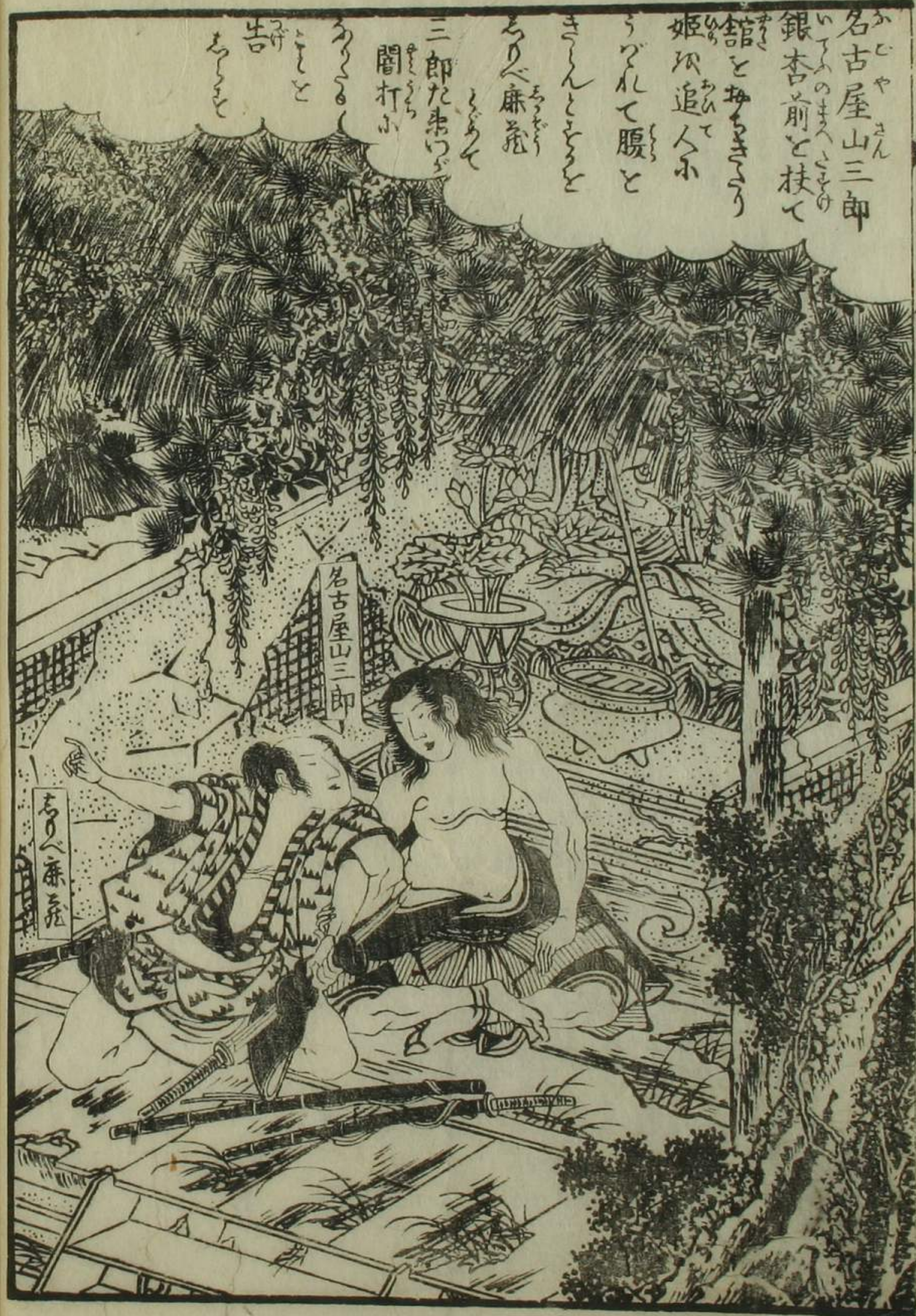
九 辻堂の危難

かくて山三郎ハ银杏の前とておひ生駒山と越て河内の国おちいり
 東の林麻竹林寺ちうきあつりまを逃来りけるお追人ども明松と
 かりて近くとおひつさければ姫君小あやまちあぐんことと
 おそれ傍の辻堂のうちにおしおを引返し追人の大勢小向合て
 権戦けが追人ども山三郎が猛勢小おそれ秋の木ノ葉の散ごとく
 四方小乱れて逃去りぬ山三郎今ハ心安しと辻堂小あつりて
 ればこいふ銀杏の前におひさびさ月のおりふくくれば堂上の塵
 のあふ足のむとあり。お追人どもの計めて我戦ひぬお姫君と

山東京傳編

手れ。腹腹よと五臟六腑ふれ出て鮮血戸板ふるぐれきつて。
山三郎ひと目もふよと悲難の涙ふしせかり地上小囃きたれ
伏せ麻花百姓もむくひ此屍に當面佐木殿の境内小三郎を傷門
こいふ人うとふれらるる則その子息うれ此死骸に此方へはと返し
少も汝等が越度ふるる夏小あぶとといひきられ百姓ども死骸の
衣服の紋所と山三郎が衣服の紋所とおろど三本傘を以て
さて相遠あけまどと安心し郡司の前小持出人よとみよて
夏以とぬさへ我くが仕合ると納得し死骸に返してはと返
かて山三郎あげきておらうとらうと麻花小あぶの流水と
汲せて屍以清め後日改葬とらうとてハ權くこふかきと返し
辻堂の板敷以とらうけて床の下以深く堀屍と埋てもあやむし

おき。香烟の灰をとて水を手向本尊の石仏ふむくひ南无宝珠
地花菩薩悪趣の苦患以救ふと念じけあふも涙はとまら
む。此時三郎を傷門かおびたる刀へ重代の左文字の刀二千五百貫
の折紙つきたる名作を以てせめてのめと取坊さる懐中物提物と
こも小麻花小持しめられ麻花いひるハ弟様二郎夏仕を辞て
後河内の国小住山ハ一旦彼地小かん越おせこのふ処へ三郎を傷門が
乗馬のりさん小馳来と山三郎が前小頭以たれて涙と流しられハ
山三郎との為体とて胸ふさかり汝親人の秘花不ごあり我居
所とてふ来て愁腸の体人ふもまらるしふるまひありそ髪尾とくき
抚ひひくハ昔呉の孫堅董卓と戦て利と失ひ馬より落て
草中小卧衆軍分散してその在所とてふど然小馬馬營中小



名古屋山三郎
 銀杏前と杖
 姫は追くふ
 うづれて腹と
 まんこ
 ろりへ麻糸
 三郎たれい
 闇打ふ
 生

名古屋山三郎

名古屋山三郎

ろりへ麻糸

軍人どみちびき草中ふりて孫堅扶ちありと
汝はそれおもまさりしぞといひければ麻花も落涙し畜類も主
人の思ひをひてぐのどと愁悲不入と生れていざ
みはざんや伴左衛門等たふ天ふ道ありて登り地ふ門ありて入
とも某が一念の誠心以て尋出御本懐以てげさせやぞと
切の馬の卒頭とあてまへり人と畜類の及そいあれども我も汝も
傍輩よて主君の思ひをうしへ自然あるふ我は汝ふはこそしぞ
飢はせぬ飢たんとてあるもの草ととりて与へ水かひるどして
つらとけり山三郎幸の父が片方の此馬これに乗じて落由んと
いひてひつとこのれが麻花あるもの枯枝とひろひこそ火赤袋以
とてか火と點じて明松と前子立て生駒山ふはかて名ふはる

暗く峠の難所ものこ案内以てまをるは口綱以て馬以
とらびれて河内の園へいそだりぬ

(十) 夢幻の落葉

それいさをおたふす六字南無右兼門の佐木館の支急は
しく旅商人小舟以て荷物の荷物以てげ人目をこらるを登り
くこ面以ておひそ大和の園ふりける宿以てめかかして夜ふ
入顔田部村をとどけと栢木の森の辺とより通るふ木蔭ふ人の
うめく声いと苦いふきこえければいぶるも立ち提灯以てはけ
えふよはあまけふ多女のむ麻子の小袖の裾以てかくかたけな
ひげひげししく打拵たるが黒髪以て乱し数所痛手とおひ鮮
血をさうらうがれと徳才朱ふ深きうづぶふ伏え息もたえぬ



めのかい木



月若の乳母
柏木若君を
守護して
おらきもの
追人とならひて
深年とおふ

折しも茂林のうちより。追人の人数若君の口不薇書以
かき。小服小ひらきして走り出。ややく佐々良三八部汝長谷部雲
六といひ合せて百蟹の巻物以奪。藤波と害して逃去たる大罪人
らよそえはけける天の夕一なり。若君以奪たるよ小汝を捕れハ。
両の手小美食を握るがや。とく手以法をひていぬ一めとけ
よ。若手むひるまでハ。忍若君以さし殺すとぞ返答いふとがれハ。
かむ右衛門いそぐ。地上小ひさるつき此所をへん又等の目ふ
かきしハ某が運命の尽なり。いそぐ手むひひとをべきいそぐとく繩と
めけられよとひひく。手とほぐぬれハ追人の人数くちくふさすぶの三ハ
郎。覚悟の体殊勝なりとぞ。已ふ繩以のるんとしたる油断故とて
ま。かむ右衛門つと立ちりて一人と踢倒し。若君と奪之と

背後小ゆきひ。仁王なりふ立ちたるらちハ形勢なり。追人の人数
ら小丸とて欺ゆれなる口押さよ。それ小打それと呼らるる力尖るる
て斬ゆけたる。かむ右衛門手ぶやく息杖小仕とたるひ故援て相むひ。
まはるもろく斬たられハ追人の大勢敵しごと。春雨に打ち胡蝶の
ごとく。才以とぞめてぞ逃去ぬ。かむ右衛門今ハ心安しと若君の前ハ
ひざぬはれ。人目以いそひゆと。此辺以立のく間。六ハのあざかん気は
まるとよおんさん。此うち小おん才以とのびとるる。そ月若君。荷物
のうち小抱き入柏木が屍ハあり。近き流れ小沈めて水葬し。又も
追人の来々回ふと足以とめて走り去丹波以存てせりぬ。
(土) 断絃の琵琶
さても六字南無右衛門ハ若君以救て我家小飯了。一回のうちに

ちのばせおき娘楓も小朝夕心はもちひてみげん権月日とせ
 は一日若君小志をし気むじさせらん。楓小ヤ一ひけていさかい
 もれ煩しや月若ハ世ふらうじき生れあふ妖鼠の為小髪交の毛と
 くひ尽され。剃髪ひらの姿とあり。頭しら小似合ぬ振袖あやの綾あやの小袖こそでの摸
 様ようさやこのたもこの捨小舟薄縹うすあざの奴袴にうまも涙の痕あとの志とあり。
 月つきまむじげふ出玉ふむ右傷門楓うで小命いのちじて柴しばの折戸やじはかしてめさせ。
 若君わかきみと上坐かみざふときてけしはひ。袂たもとさ一回ひとまわの枕まくら隠家かくれがさぞおん気きづあり
 久存くそんあふ人目ひとめはるる多おほかみあはるる水みづばせんをがり。御先祖ごせんぞとなほ
 川がは川がは人王ひとみ五十九代いそとうぢの帝みかど。宇多うた天皇てんかうの御末ごすえみて佐さ木成きなり頼公よりひこの示
 孫こと生うれさせ玉たまひ。あゆこの人ひと小か。ばれて金殿きんでん玉楼ぎよくうのくち小生なま三
 玉たまひ錦にしんの茵玉いんぎよくの床ゆかちちに一点いっけんの不足ふそくる。あふに風かぜふとくわたり玉たまつ

かんあふる小奸臣かんしん倭者わいしやの為小世よはせむめられ。めらるる貧家ひんが小志こしのそと
 玉たまひ粟あはの飯椽いひぞらの踏ふみつぐふか命いのちははるるの。巖いわの地ちをろ紙かみぶと
 夜よの物ものさ薄うす看みあて。壁かべも月つきの燈あかり火かふさきかんとありまふ。い
 へさよといひケルケル若君わかきみのさぬひさふ。汝あなが忠志ちうし過あや分ぶんるる。我われの
 いうちあるともいふとれども。唯ただ氣きづかへき父母ふぼの功いさなり。父ちち上かみ御ご勤ごん
 葛くわの糸いととるもむいて后のちいづくいさる野のかたやえん母はは上かみはるる山さん三郎ざぶらう小
 扶たすられて落おちむひ。ぐこれも御ご在所しよ知しれざるは。追人おいて小捕とられ玉たまひも
 知るべし。あるまゝの父ちち上かみや。あはれの母人ははやとて。ちのび涙なみだにむせ
 びあふ。かむ右傷門楓うでも。枕まくら根ねと推量おしりやうして。とも小袂たもとはをりたる。
 ちの折やじも外との方かたふ。人の足音あしなひにければ。かむ右傷門楓うで小目めぐハ
 ちて若君わかきみ一回ひとまわ小つし。さあぬ体ていを居あなせり。人の親おやのさるる八やち圍ゐ

あつても。盲目とありし我子也。道に迷つ杖小笠藤ふおれし
 女房の琵琶は背よよとなく。盲児の手引引て四年ぶとて我家の
 軒の垣衣の露あき草踏分て柴折戸はとくと打たけはなごことち
 て。かむ右馬門戸はひききえてかれば妻の磯菜子の文弥京よりり
 体るればこへとひつげどよとて。まづともちひてうちよへる。楓はや
 母の声と歩ほけていそぐく走つてか夫婦兄弟四人の者ひき
 ぶとの對面ふたぐひの喜びひふふと。楓へ盥ふ湯はたつ。母の
 裏脚草鞋とと足とそだちるとれば今ふかひぬ孝行やと
 うれ。さらけに堪ざりけり。さて磯菜夫ふむひひいと。同ことあつて
 あり。何う語つてらんや。且中よとて。文弥。文弥。幼年れども藝
 道ふ心はあつて。片時も地をたふざりし。おのづから妙は得て師匠
 沢角

檢校どのも。たぐひまらるる。多用者之賞美。一玉ひ。此糸檀の甲の
 琵琶一面ふ。秘曲の免状はてて。むい。ゆい。彼が一曲はききせぬ不
 しく。二つふの楓が教も又ぬしく。さうち古郷がまじしく。文弥もま
 地んおま姉はま。つとひ。おま。俄ふ。ひ立師匠。ま。のい。ぬ。は。ま。う。と
 下りゆひぬと。ものがたれば。かむ右馬門ひ。と。喜び。む。は。む。の對面無事の
 教えて安堵あるて。藝道も上達せ。と。ま。ま。え。ぬ。ち。さ。も。能。生。立。一。ま。え
 たぐふむらり。小文高う。あり。け。を。こ。て。餘念。多く。文弥が。頭。は。撫。は。く。い。ふ。文
 弥。恭。く。両手。は。つ。き。父上。御安。体の。様子。さ。う。か。ひ。花。び。ふ。堪。え。づ。ど。こ
 おこる。や。小相。の。ぶ。る。楓。へ。と。と。十六才。姿。ま。ま。と。く。美。麗。ふ。て。手。織。木。綿
 の。振。袖。も。綾。羅。ふ。ま。ま。風。情。あ。る。が。母。の。そ。ぶ。ち。ゆ。く。り。長。ぐ。の。脚。在
 京。さ。を。後。苦。勞。と。さ。さ。ゆ。ん。と。あ。け。れ。氣。げ。ひ。く。せ。し。が。恙。あ。れ。体。て。る。て。



六字南無右未の
 月若とかくまひ
 南無右未の毒磯茶
 盲児の文弥と具くと
 京より家ふ
 飯り来



名世屋巻

十

かりく心やまきまるといひくればいやく我苦勞よりおこと夏妖蛇も今
 小まらぬよし。其方以て父上孝行尽と辛勞成さぞうしと推量し
 づられて居ても片時も口とらて夏あふりしそや縫物髪もよく仕
 おおえはるよし。父上の消息よてそく困ぬそ。うらむせ。髪のか
 づ成つりくすまへ。うてもうはくううくでさしぞ此きものもかこ
 こが縫う。めつむルの手ぎを。廣き都のうちおまじ。かごとが如き娘
 はずれと。多へばいさ。妖蛇の夏おもひいづて不便あり。何ふはけ
 も子成や。入親の心ぞやせぬ。良あつてあむ右衛門佐木館
 の騷動。柏木が忠死の子細。若君成つてまひやく夏の始末成語
 きらせけ。磁菜かどうに不慮の御難義いさへ。うとて法なれば
 かむ右衛門。いふ不ごりふてもめつぬ夏。そちも文殊も久しづりあて

若君ふ。めん目くはくまうれそ。楓成はけて奥の一回ふのいあはせ
 ころ木の念珠はぬらそ。例の念仏ととまは。うふ時刻はうは
 けり。日あも漸くめうく。比京下りの古書画の商人いそがが。空
 ろうと来て。前の日とせまじ。金岡が百蟹の繪巻物外お望人
 いそき。唯今價とおほ。ありれば望の方へやぬ。あま。い
 おむとやんといふ。あむ右衛門打閉て。其の多と火急なり。せめて三日ま
 ちむられや。といへ。商人頭とあふ。某も旅の夏うれ。三日ま
 へ。うれ。あま。今夜三更の時。ま。ち。あ。その期が。い
 れ。ば。ち。あ。め。方。賣。は。う。れ。を。て。詞。成。つ。ひ。て。立。飯。を。ど。ろ。外。の
 方。人。声。て。足。音。ひ。き。け。れ。何。変。る。め。と。り。づ。う。回。も。り。村。長。小。案
 内。さ。て。捕。手。の。葦。組。子。も。ど。や。と。入。来。る。組。子。の。頭。黒。星。眼。平。と。い。ふ

せめう二ツの難義卧竜楠氏の智謀ありとも。のぞき道調どびい
あふぐふと藤浪、所縁の者小打れんこと。ゆひておひし命あれ
ども。ゆふさ六六是非もろし。若君瓜肩まわらせ。のぞきはけ
のぐれんそ。若ゆふらぶるその時ハ御腹をよめやし。斬死しとより
外ハありと。ひととごち心のうちにはうかばれて。曰葛篋のうらり。
一腰派取出し。行灯提て奥の一間小立ゆんと破れ紙門とこと
ふ。目見の文弥財布のうらり。あふさの小判派取りで
し。手探りにゆき居たが紙門のわく音小ぢぢり手とて
背後へ。なるまむ右衛門目をや。えほけて。ゆふらういひ
けら。いふ文弥。それバ餘程の金派持たるが。いふらあふそ。あ
金持し。そへ出して。えせ。とゆふ文弥。いふ。これハ師匠し

あぐりなる金うれバ親人。あふらも。えせ。じとゆふ。かむ右衛門
師匠。あふらも。幼年の汝。大金派あけけ。や。だれのこれか。
いふらあふそ。あづむじと問れて。文弥。口あり。いや。これハ途中
あて拾ひし金。あづむじ。あふら。詞のあ。え。死をうら。子。ば
かむ右衛門。ま。あ。途。中。あ。ひ。ひ。の。派。か。し。お。道
ふ。あ。拾。ひ。ほ。ろ。を。實。王。の。と。ひ。や。ら。れ。て。え。ん。ま。く。
す。と。こ。ハ。此。金。あ。づ。り。も。拾。ひ。も。せ。じ。道。中。の。旅。店。ふ。と。あ。と。合。世。旅。人。の
金。派。無。さ。と。ほ。ろ。を。ゆ。と。因。て。か。む。右。衛。門。あ。れ。れ。そ。あ。り。ふ。び
ほ。ろ。て。引。な。や。ふ。あ。と。ゆ。ふ。そ。ま。と。こ。う。真。實。う。元。来。ふ。ん。ち
孝。子。と。そ。あ。非。道。と。か。ら。う。あ。づ。れ。性。質。ふ。あ。と。今。の。い。ぬ
ま。と。い。ひ。が。在。京。の。り。づ。め。同。ふ。さ。び。り。心。の。か。ら。う。の。う。これ

きけよあはれうらうら^{とら}牙夫王法^{きりぎりす}あつて。ふた^{とら}所^{とら}ふハ^{とら}神^{とら}灵^{とら}あつて五^{とら}戒^{とら}
 のうちありとも偷^{とら}盗^{とら}とあつて。たと^{とら}塵^{とら}一^{とら}とち^{とら}うても盗^{とら}と
 かして。豈^{とら}く^{とら}罰^{とら}以^{とら}す^{とら}あ^{とら}れんや。げ^{とら}く^{とら}心^{とら}底^{とら}やあ^{とら}は^{とら}は^{とら}所^{とら}存^{とら}
 や。さて左^{とら}の手^{とら}ふ^{とら}あり首^{とら}以^{とら}持^{とら}て右^{とら}の^{とら}ぶ^{とら}以^{とら}さ^{とら}りあ^{とら}げて。頭^{とら}の^{とら}そ^{とら}
 げ^{とら}け^{とら}打^{とら}ふ^{とら}打^{とら}た^{とら}ふ。且^{とら}怒^{とら}且^{とら}悲^{とら}。あ^{とら}つ^{とら}れ^{とら}決^{とら}成^{とら}お^{とら}じ^{とら}は^{とら}。あ^{とら}つ^{とら}ま^{とら}き^{とら}び
 く^{とら}い^{とら}あ^{とら}あ^{とら}あ^{とら}の^{とら}心^{とら}も^{とら}あ^{とら}らん^{とら}を^{とら}親^{とら}の^{とら}意^{とら}非^{とら}こそ^{とら}さ^{とら}つ^{とら}か^{とら}けれ
 文^{とら}弥^{とら}へ^{とら}や^{とら}が^{とら}越^{とら}上^{とら}る。あ^{とら}が^{とら}笑^{とら}ひ^{とら}て^{とら}い^{とら}ひ^{とら}け^{とら}ハ^{とら}貧^{とら}乏^{とら}者^{とら}の^{とら}子^{とら}こ^{とら}う^{とら}あ^{とら}れ
 正^{とら}直^{とら}ふ^{とら}の^{とら}あ^{とら}て^{とら}い^{とら}そ^{とら}も^{とら}出^{とら}世^{とら}は^{とら}る^{とら}と^{とら}お^{とら}じ^{とら}此^{とら}金^{とら}を^{とら}て^{とら}官^{とら}成^{とら}ら^{とら}れ^{とら}ハ^{とら}生^{とら}ハ
 安^{とら}樂^{とら}ら^{とら}り。さ^{とら}ら^{とら}と^{とら}呵^{とら}あ^{とら}ひ^{とら}と^{とら}。き^{とら}げ^{とら}が^{とら}き^{とら}く^{とら}や^{とら}ど^{とら}さ^{とら}け^{とら}れ^{とら}ハ^{とら}止^{とら}齒^{とら}成^{とら}
 る^{とら}じて^{とら}声^{とら}以^{とら}あ^{とら}ら^{とら}げ^{とら}大^{とら}膽^{とら}不^{とら}敵^{とら}の^{とら}今^{とら}の^{とら}こ^{とら}を^{とら}さ^{とら}ら^{とら}く^{とら}子^{とら}を^{とら}あ^{とら}も
 くれ^{とら}ど。天^{とら}魔^{とら}鬼^{とら}波^{とら}旬^{とら}の^{とら}所^{とら}行^{とら}ら^{とら}り。親^{とら}子^{とら}の^{とら}恩^{とら}愛^{とら}ら^{とら}れ^{とら}ま^{とら}を^{とら}ら^{とら}り。

七^{とら}生^{とら}ま^{とら}の^{とら}勤^{とら}當^{とら}せ^{とら}ら^{とら}う^{とら}ら^{とら}も^{とら}い^{とら}そ^{とら}で^{とら}お^{とら}け^{とら}そ^{とら}足^{とら}以^{とら}あ^{とら}げ^{とら}て^{とら}踏^{とら}と^{とら}せ^{とら}ば。
 文^{とら}弥^{とら}ハ^{とら}財^{とら}布^{とら}以^{とら}懷^{とら}中^{とら}。勤^{とら}當^{とら}ら^{とら}く^{とら}れ^{とら}親^{とら}で^{とら}も^{とら}子^{とら}に^{とら}あ^{とら}れ^{とら}ハ^{とら}長^{とら}居^{とら}ハ
 無^{とら}益^{とら}と^{とら}は^{とら}ぶ^{とら}れ^{とら}つ^{とら}。あ^{とら}ら^{とら}と^{とら}探^{とら}ら^{とら}そ^{とら}い^{とら}で^{とら}ん^{とら}と^{とら}も^{とら}か^{とら}む^{とら}右^{とら}衛^{とら}門^{とら}奴^{とら}心^{とら}不^{とら}志
 の^{とら}び^{とら}ど^{とら}。走^{とら}ら^{とら}り^{とら}て^{とら}。又^{とら}踏^{とら}た^{とら}つ^{とら}せ^{とら}お^{とら}れ^{とら}あ^{とら}ら^{とら}と^{とら}て^{とら}。又^{とら}悪^{とら}口^{とら}と^{とら}悪^{とら}口^{とら}と^{とら}れ^{とら}ハ
 る^{とら}不^{とら}踏^{とら}々^{とら}々^{とら}踏^{とら}た^{とら}つ^{とら}せ^{とら}益^{とら}悪^{とら}口^{とら}か^{とら}ぬ^{とら}ど^{とら}。か^{とら}む^{とら}右^{とら}衛^{とら}門^{とら}い^{とら}く^{とら}怒^{とら}
 頭^{とら}肚^{とら}の^{とら}用^{とら}捨^{とら}あ^{とら}。踏^{とら}は^{とら}け^{とら}く^{とら}ら^{とら}な^{とら}せ^{とら}ハ^{とら}文^{とら}弥^{とら}ハ^{とら}片^{とら}息^{とら}不^{とら}あ^{とら}り^{とら}あ^{とら}ら^{とら}。
 か^{とら}不^{とら}も^{とら}悪^{とら}口^{とら}と^{とら}ま^{とら}ま^{とら}が^{とら}れ^{とら}ば^{とら}か^{とら}む^{とら}右^{とら}衛^{とら}門^{とら}怒^{とら}気^{とら}天^{とら}子^{とら}さ^{とら}の^{とら}あ^{とら}ら^{とら}ハ^{とら}カ^{とら}ハ
 と^{とら}ら^{とら}と^{とら}と^{とら}後^{とら}手^{とら}も^{とら}と^{とら}せ^{とら}ど^{とら}肩^{とら}尖^{とら}四^{とら}五^{とら}寸^{とら}ま^{とら}と^{とら}こ^{とら}ら^{とら}ば^{とら}。呀^{とら}と^{とら}一^{とら}声^{とら}た^{とら}ぬ
 ぎ^{とら}り^{とら}て^{とら}。う^{とら}は^{とら}ぶ^{とら}ふ^{とら}た^{とら}つ^{とら}れ^{とら}た^{とら}ら^{とら}か^{とら}け^{とら}て^{とら}ま^{とら}ん^{とら}と^{とら}せ^{とら}ハ^{とら}恩^{とら}愛^{とら}
 千^{とら}と^{とら}ち^{とら}の^{とら}葛^{とら}世^{とら}電^{とら}の^{とら}緒^{とら}足^{とら}小^{とら}ま^{とら}と^{とら}ひ^{とら}て^{とら}背^{とら}後^{とら}の^{とら}か^{とら}く^{とら}ひ^{とら}き^{とら}め^{とら}ど^{とら}さ^{とら}ら^{とら}
 こ^{とら}ら^{とら}と^{とら}ら^{とら}。さ^{とら}ひ^{とら}き^{とら}り^{とら}て^{とら}又^{とら}う^{とら}と^{とら}あ^{とら}ら^{とら}。劍^{とら}の^{とら}下^{とら}小^{とら}妻^{とら}い^{とら}を^{とら}某^{とら}え^{とら}り^{とら}出^{とら}

新古今和歌集卷之三

七十四



六字さいあつ

南無右来の

怒りふた人を

一子文弥と

手打ち

きりつる



六字さいあつ

中れ志がしきまをいふことありとぞむれが。あむ右衛門のやぶらむ子
 かろく小生おれて罪にこそせんより一とひよ手おれが親の
 慈悲をといひつ。しそ葉がのけつきのけて。あなきなりつげんと
 立ちあつ。しそ葉の夫の手おれつ。その身は志がひきあじ息は
 ほしく。おの金の盗物おれへど。まことへ娘根が父の代りてしこ
 じごも。かむ右衛門合点でど。妖蛇おれをいれ片輪お娘は何
 西急お大金おしてめくべき。あんぢもこそよのつらとてあがはしく
 れべ。しそ葉奥の方お赤むひ。やく娘を来て父上おことか
 心底ものぢられ。やくとよづめ娘根一声答てめけりてしが
 文弥がきりれー体お入て。むせめつとぞなつれけ。しそ葉文弥を
 抱めへ。しうめんが父上お本心おめつらうち。そんてくれとていこ

かりつ。楓おしむひ。つらつたけらるれども。委細のまけと父上に。そく
 く告ふと。しそ葉おれてやくく。親おあげ。かむ右衛門おうちむひ
 御不審ハ理より前の日父上おんものめつらふ。つひてなづめる百兩の
 巻物おひのけど京へより商人持参せしが。その商人お捕(出所と
 たらふ盗人の在所も忘れ。巻物も手お入道理とてども。かむはしる
 日葉のにおへお夏成たしぢ。さりこそ價は百兩といふ大金おれ
 ばこそ我手おれと。がし我手おれぬ。末代盗賊の汚名おれ
 ぐ夏あつ。金はくよこれまで。つらつて。武士道はしとて先祖の
 各きとてけがとこと。おれ無念あり。口おし。さうとて男かきふさき
 むひ。が骨おれ志をいふ。何とぞ金ころのてあげやんと。と外に仕
 のこも。幸京都五條坂の傾城屋篠村八幡の門前お旅宿

名古屋巻之三
 〇一〇
 〇一〇

て居て同ひそふふありて此文以百兩小買られもなほに心ひき
 やらふうけがひしが。妖蛇のいられと同こそ其の終破談小かぶ金うけいこ
 ろふ心圖小我才の片輪ふ心けつざりし度とさうふららるひつと
 く。おふんとさうふ捨る神あれたさくる神もあつと常言の
 ごとく今いさうの年ひさる傾城屋がPとふ。それ等を蛇はひの女
 まるくありしが。實の因果あてさることあつとじく殊更半れつきも
 れば紅川原あてさせものふせびあさるりあつとて利得おふん。
 おくさせものふらる心のうへ五年ひかぎり百兩ふのむげとPふらり。
 又さものへからう。たそ生皮とさめれ生膳はさるこも百兩の金かこ
 のへ上の汚名はささうげば露さるりもいさうとさうとさう百兩
 さうさうき川竹のあがれとさ。おふげとささはさるり諸人ふららと

まじさる。あつと罪障のきえうさめんとさうとさうもあつと心以決し。
 それふきりてあつと上へいひた。のみて居はるふ今日ささも
 母さぬの。おんうりひ幸ひとし妻が心底とさうあつ。それと裏口より
 こもるあひいさ。かふふに母さぬの手形とさうとて證書以渡し。
 百兩の金瓜うりさ。今夜のうち小都へ旅立さうふ約して。あつし
 折る。捕手の騒動若君の御急難母さぬとさうのめけを唯あきれ
 てとりゆ不審はるさ。さむひとさう。文弥が持し。の金へ妻が才の代ふ
 ちがひさるゆと。泣く。のさうあつ。かじ右衛門の不審なられらる。
 それに文弥が口さ。盗し。さるさうひり。と血がはるげとさ。さひく
 る。いさ菜あつ。さうひける若君の法急難とさうとさうとさう。文弥と
 おんあつ。さうひつさしが。忠義小疑らる。おんあつ。さうと親

子の愛着也。世心もかれあんと。文弥のひやくめ。父上の氣
 質塵をりも。やがめる夏成さるひま。此金以次盗し。いひ悪口を
 ば怒るふ乗じて。恩愛の継成なら。手打しあらん。必定之志うぐ
 らん。心げくも。ひきりたれば。いとも。うに。閉る。其
 宿世の因果也。盲目となり。汝れ。主君の。後大事といふ
 也。戦場の。ん。た。る。が。く。武士の子。さう。め。た。う。あ。ひ。う。と。
 日來。く。ち。と。く。い。ほ。に。若君のおん。才。り。さ。る。の。戦。場。の。お
 死も。同。然。ぬ。ぐ。ふ。も。る。た。幸。之。さ。り。あ。ぐ。た。と。計。も。あ。れ。親
 に。む。ひ。て。悪。口。盗。世。を。ど。勿。体。を。て。申。し。か。じ。れ。を。り。へ。い。じ
 也。といひ。く。も。も。日。取。の。こ。と。を。れ。も。も。あ。て。て。い。え。う。の。愛。念。と
 絶。こ。と。あ。こ。と。何。事。も。い。ふ。忠。義。の。為。を。て。や。り。く。得。心。を

ほふ。ける。げ。あ。も。く。も。の。ひ。い。ぞ。や。め。ほ。ふ。さ。れ。く。さ。る。ド。さ。れ
 め。ど。ま。の。う。げ。あ。て。地。才。の。様。子。は。う。ふ。ひ。ふ。若。君。は。う。も
 ろ。ひ。て。の。ぐ。れ。出。の。あ。ら。わ。時。へ。き。と。死。覚。悟。の。体。ふ。え。た。れ。も。
 村。の。口。へ。山。道。ま。で。捕。手。の。人。数。か。ら。居。る。は。同。く。づ。れ。た。も
 の。道。へ。さ。し。き。と。首。を。り。臉。を。う。さ。ぶ。盲。目。日。わ。れ。の。差
 別。も。あ。じ。た。ま。眼。平。若。君。の。地。才。は。ん。知。と。も。忠。義。の。心。以。て
 め。む。さ。や。り。仕。損。し。は。じ。大。丈。夫。の。地。才。は。ん。恩。愛。ふ。ひ。り
 されて。お。む。か。こ。こ。よ。の。地。才。思。智。ふ。女。の。心。の。い。ひ。朝。夕。と。あ。れ。ど
 手。あ。ら。わ。け。て。う。れ。ま。で。ふ。育。め。げ。た。い。と。子。は。と。り。め。て。殺。さ。う。と
 胸。の。うち。傳。推。量。さ。れ。し。志。の。も。あ。ら。ど。娘。根。葉。の。つ。つ。れ。こ
 い。ひ。る。ぞ。世。中。の。親。の。情。へ。我。子。の。片。輪。は。ご。こ。も。も。の。く。し

ちが常るちがふ諸人しよじんふ親瓜おやうりさらさして丹波の国の恩果娘と
 のちくまでもちが瓜うり残さとも不便ふびんさし妻つまが身みせめて十年じゆんじ若
 くば此こゝ才瓜さいうり賣ても娘むすめにうき目めいさへしものときなきたく兄弟
 うさりの手てとさうらううらう夫おつとおられ瓜うりとせじこたへ志こゝろのひほる涙
 験まがの堤つゝとやきりてのうれあつてごころよりくるがむ右馬門うまど始終しじゆうと
 同なくふひるるれば百倍ひゃくばいのほく鉄石てつせきのどた心こゝろも肝かんやまきりさ
 うさひ五臓六腑ごぞうろくぷ悩乱なうらん。素もと一詞いっしものでざりがやのうそいひるるハ
 文弥ぶんや夏若君なつわかしと同年どうねんといひ刺段さしだんの姿すがたといひ親おやあつちも似にたる
 由急よしゆき坊んぼんがかりとさひほれていへううも何なにのふも盲目めくらみて用もちふたど
 と一番いっばんふさひて死首しづのまぶさ瓜うりさだ盲目めくらめあれたのちそりき
 ふはほるるりも心こゝろほらばりばり楓かえも容ゆるへとぶれたれども片輪かたわあれば

身みうりもあつて。嗚呼あゝやうもの子こどもへ持もちたる。親おやの恩果おんぐが子こに
 報むかひ忠義ちゆうぎの用もちふたさうさう支しくも。残念ざんねんふさひひが。おまへをいんいんドめ兄弟あに弟いの
 子こどもら。たぐひまれあつ心底こゝろうう持もちてさめの子こあるさといひて涙なみだと血ちと
 相和あひまして滝たきのごとく流ながしけり。文弥ぶんやハ母ははの介抱かいおめて。ヤリくと起た
 ろあつて。おとさう。ヤ手て瓜うりはたていひけり。渴あせしても盗泉たうせんの水みづを
 飲のむとやんさくもの瓜うり母ははのあふせさひひさる。盗ぬ金瓜たうぬか次血つぎち
 こ。親おやをいりさう。詞ことばの罪つみ坊んぼんさしし果報くわんぱうははて生れ
 もほらぬ盲目めくらとありぬ水みづバ。せめて藝道げいどうとくげも。父母おやふと老後の
 心瓜こゝろ安やすめ。片輪かたわか奴やつふ法はふ不便ふびんさくまひ。法はふ養育やういくををまれ。大恩おほいと
 むくはんものこ。それたの。一いっふ四年よねんこのこ。精神せいしん瓜うりさくせ。此こ交若君このまがわかし
 に一命いっめい瓜うりたてまうり。婿むこうも身み瓜うり賣うりま。此こ志こゝろへささ心こゝろををくお不ふさ

もん生つれ死つれと兄弟二層ふつれども。死ハ一旦はして安く生て
諸人ふ面紙さし父の汚名はさぞめんとおぼしうも。姉う人の心底ハ
又ふしがた孝行ハ此年来子び得し。琵琶の一手は父ふ閉せ
中を死すのハ心残りふゆべく手紙負ておぼしうあふさるべれども
一曲はふまうりゆべ。冥途の旅のおた土産かたのめことおぼ
されて。お同くさるれし。母人さぬその琵琶をさるふあぞ。いそ菜
法く琵琶さるといふてあふれ。わどふ年ハ十一才の盲児が
縹木綿の肩あげふ血し不志たも疵口の。いそまことさへて琵琶
かきあし。いと苦しげふ声たて。平家とぞめりける
さうわどふ。一の谷の軍やづれいふ。武藏の国の住人熊谷の
次郎直實平家の公達たすけ船ふのんとして。いそまの

かえおちおれあつらん。あつれられん大將軍おくぬぐると
あひ。あそるふあつて。いそまのいそまあゆもる所ふ。いそ
ぬいぬいふ雀ちさる直垂小萌黄薰の鎧着て鉄
形打たる甲の緒を去り黄金作の太刀をたれ。二十四さの
いそまの突おひ頻藤弓りち。連銭馳ある馬ふ。金覆
輪の鞍おいてのつりける者一騎。沖ある船を目ふりけ海へ
さうと打へ五六たんむるとぞあつめせらる
とうたふ唱哥も声くもり。ひくてもあつてたしうあふねとさうさ日
束の手練こいひ。此世のまどりこさる。苦し息とぞけまをほく三
重の甲とあげ。初重のこよ妝て。いそまはたりければ大絃の嘈
として急雨のごとく。小絃ハ切くじて私語のごとく。昭君馬上ふあふ

新古今和歌集 卷之十一 廿二



文弥手とおひ実の
月若の身代おまん
元悟と本心と
地出のおにやげ
なりとて平家と



上り心おまん

かへで



かゝる其色
いとあられ
あり



おんや

いとふ

楽天客舟小閑ほりも。もろのゆにまらりて哀ある。かむ右傍門耳と
そバだて、閑居たるが。恩愛切ある難のうふ。ゆき調とまけ
ば皮肉もなまらうらちして。そくゆきて泣伏る。穢菜楓も。ころ
もふ波ふむせむりある。文弥いあふも声ふりたて

熊谷あまごをちりくとあぐりて。あれ法覚ゆへいふもして
たまけまらう見んとあ存ゆども味方の軍兵うんふごどく
ちりして。ごものごしまわいせぬゆい。あふもあまらうの直実が
手にゆけまらりて。後の法孝養をもほろゆつりゆいんごや
たれば只何様ゆもころく首をとれとぞのこゆひたるとぬ
ぐあゆりふいとごりて。いづこふ力を立べともおふえご。目も
くれ心もさえなると。前後ふくふおふえくれご。はしもあまご

ことあまねば。ちりく首をとれかしてげ

ころたふ声さん。ちりいふらと。わどくたえん琵琶の緒ふらゆい
の疵口より。さとあぐれべあか苦し。あまらうたふことゆひづし。
これまごごそ。琵琶はわかれ。此世々々。ま一條の杖となよりの暗穴道
死出の旅路へ殊更ふ黒闇地獄。迷行無目の餓鬼こ生れ出て。
呵責はうけん。心定ある。それと不便とおぼとる。末期の水は
さらまぬに逆縁なぐお手づる。香花と手向なぬれ。我才のた
めの功德あへ他人の千僧供養より。たふふまきりゆ。さぬたふ
親子ハ一世のちぎりのききふ。盲目のかあ。さへ父上母へ。千万年のか
齡よだて冥途へおれをまありとも。お教はるる夏かほいこ。さへこれ
が三世のつれ。又あふそいあじとまら。さかほしくまらと。お父へい

阿弥陀仏と声もあつたに。んんーこきりべ。むざんか首の前ふまらびおち。
 軀へりしろふたつれ。て。穢菜。楓。わ。刀音と共ふさびて打ぶ。折しも
 遠寺の鐘の声。や。三更の時あれば。後。豫。あ。と。ま。り。て。の。金。は
 そ。と。と。ら。手。を。か。く。軀。と。葛。籠。ふ。つ。し。泣。伏。妻。は。引。物。に。は。て。居。る。処。に
 あ。ぶ。と。此。金。持。て。裏。及。り。の。巻。物。と。買。取。来。れ。娘。は。今。宵。生。別。去。
 し。も。あ。ら。と。と。お。し。ひ。へ。と。そ。鮮。血。を。さ。る。首。た。づ。ま。な。人。は。ひ。き。こ。て。へ。
 乃。と。の。紙。門。と。な。て。き。り。て。その。後。音。も。あ。り。け。て。約。束。の。時。刻。ぞ
 こ。星。眼。平。手。の。者。は。の。て。来。て。や。し。く。か。じ。右。衛。門。若。君。の。首。は。う。い。ふ
 く。と。と。な。れ。れ。一。間。の。うち。より。か。じ。右。衛。門。首。桶。は。た。づ。ま。て。お。ち。り。水。つ
 の。や。出。老。命。は。し。じ。つ。た。く。い。は。ま。り。地。首。お。ひ。ひ。ひ。と。後。点。檢。と
 こ。い。は。せ。ば。眼。平。い。そ。く。某。月。若。君。の。成。り。く。又。知。り。なる。ま。へ。の。心。を。知。り

あ。ん。ら。る。れ。ば。も。假。首。へ。口。を。海。ゆ。又。は。は。も。の。つ。ら。く。ば。怒。る。ん。ぢ。う。お
 の。う。ら。あ。り。と。あ。い。つ。首。桶。と。引。よ。せ。て。巴。蓋。は。も。ん。と。ま。か。じ。右。衛
 門。若。假。首。こ。の。あ。い。は。き。り。死。と。な。れ。竟。悟。て。袖。の。下。に。刀。は。抜。け。
 の。と。と。の。そ。い。は。い。げ。た。危。く。ぞ。え。たり。る。眼。平。蓋。は。そ。の。の。け。で。と。れ
 へ。と。ど。ろ。く。体。も。し。げ。文。殊。が。首。の。中。より。陰。気。と。吐。か。じ。右。衛。門。が。目。に
 の。と。え。く。ダ。眼。平。忽。眼。く。い。ふ。も。月。若。君。の。地。首。に。相。逢。は。下。く。お
 ぼ。と。と。賞。義。し。て。首。桶。は。と。り。ゆ。ら。徒。者。は。ち。づ。げ。け。そ。ま。ま。の。人
 数。と。と。く。ひ。き。と。と。下。知。と。は。し。と。と。び。か。じ。右。衛。門。ふ。ひ。ひ。若。君。の。首
 お。ち。る。く。は。汝。お。ち。の。め。ひ。は。目。悪。の。罪。の。れ。が。も。此。友。の。功。は。り。大。殿。の
 御。前。に。た。ふ。さ。り。は。つ。ら。い。と。い。ひ。捨。て。人。数。は。引。は。れ。ま。ら。る。か。じ。右
 衛。門。の。息。と。吻。と。は。は。て。と。な。ま。た。の。人。数。は。引。は。れ。ま。ら。る。か。じ。右

各古屋巻之三

十四

若君瓜智しヲあつと交交せばとらひつ。まよ折しも妻のそ菜息も
 けれあへよとる飯了。様子いさなきにがわれ。文弥が一念頭ふとらして
 陰気と吐て眼平が眼をくらせ。十分に欺きとらして。そ菜心もち
 けれ。の巻物とらして。おしつら。おむ石街門ひりた。そお家の重
 室子。またれほして。巻物とら。それ入のれ。ばもれ。が。汚たる名瓜をき
 未代までも。まよめ。これとら。も。楓が孝心。ふた。ゆゑ。娘ハも。や。旅
 ま。の。多不便。ま。ま。お。か。ん。今。の。や。ゆ。瓜。楓。と。ら。け。も。あ。で
 ハ。暮。手。の。畧。訓。み。で。小。蛇。の。た。う。前。表。か。ん。文。弥。が。初。名。瓜。栗。太。郎。と。名。づ。け。も。
 丹波の国の爺打栗爺お打。因縁。只。此。う。瓜。文。弥。が。菩。提。と。ら。ん。が
 肝要。ま。し。眼。平。一。仮。首。と。ら。し。ゆ。た。い。が。今。ふ。そ。れ。と。あ。ら。れ。て。う。そ。か
 こ。ふ。を。来。ん。ハ。必。定。ま。り。し。片。時。め。や。若。君。瓜。お。じ。や。と。ふ。え。り。じ。と

ひて奥入月若のキ瓜たぐえてまよ。いづれば若君ハ目瓜泣け。
 夫婦の忠節過分ち。便りた文弥がオのんそやと。あけき
 の。多。一。言。が。女。お。あ。ら。と。ま。の。千。石。し。し。夫。婦。が。オ。あ。ら。し。づ。く。
 かむ石街門巻物と懐中。一。軀。と。り。れ。た。る。葛。籠。と。お。ひ。若
 君のおん手瓜らね。妻のいそ菜ハ琵琶といづれ。地水火風の四ツ
 の緒のきれ。我子のゆき。と。轉。手。撥。面。半。月。の。月。の。光。り。
 ば。ら。と。あ。て。播。磨。の。ゆ。く。ぞ。お。ら。ゆ。に。け。り。
 ○ゆて。かむ石街門夫婦。若君瓜。杖。播磨。う。河内。ふ。い。り
 取縁の寺に。な。う。と。て。文。弥。が。軀。と。畑。と。か。い。の。琵琶
 と。施。物。と。し。て。仏。豆。と。い。う。も。若。君。瓜。の。そ。菜。瓜。つ。け。て。ゆ。き
 に。忍。び。せ。お。に。そ。の。オ。ハ。ゆ。の。巻。物。瓜。た。ぐ。え。ん。桂。之。助。銀。香

前の。ゆくへんたつりすふ。いぞんけりごと

名可屋巻之三

一六

卷之三終

